

# 人間イエスの宣教活動に見られる福祉実践 (2) －人間イエスの宣教活動とその終焉－

東北学院大学教養学部 大澤 史 伸

## 1. はじめに

本論文の目的は、聖書における人間イエスに見られる福祉実践と思われる活動について取り上げ、それが現在の私たちに対してどのようなメッセージとなっているのかについて考察をすることにある。著者は、「人間イエスの宣教活動に見られる福祉実践 (1)－誕生・洗礼・宣教－」(専修総合科学研究第24号、2016年10月20日発行)の中で、そのサブタイトルにもあるように、人間イエスの誕生・洗礼・宣教(特に、イエスの行った「神の国運動」、「祈り」、「説教」)についてみてきた。

本論文では、さらに進めてイエスの宣教活動の中から、「癒し」と「奇跡」を取り上げることにする。言うまでもなく、イエスをキリスト(救い主)と信じるキリスト教徒にとっては、この「癒し」も「奇跡」もほとんど抵抗なく事実として受け入れることが可能であるが、キリスト教を信じていない人々にとっては、このイエスの行う「癒し」と「奇跡」をどのように受け入れ、理解すればよいのか分からないというのが本当のところである。

本論文では、このイエスの行った「奇跡」と「癒し」が当時の社会や人々にとってどのような意味があり、そして、そのことは現代に生きる私たちにとってどのような意味があるのかという点に焦点を当てることにする。また、イエスの宣教活動の中には、常にと行っていいほど、当時の宗教指導者との対立と論争があり、最終的には、イエスの宣教活動というものは、イエスの十字架刑という処刑で終わりを迎えることになる。

なぜ、イエスは当時の宗教指導者たちと対立や論争をし、最終的には、極刑と言われる「十字架」に架かり死ぬことになったのか?そのことについても明らかにしていきたいと考えている。また、「人間イエスの宣教活動に見られる福祉実践 (1)－誕生・洗礼・宣教－」(専修総合科学研究第24号、2016年10月20日発行)との重複にもなるが、本論文でも、当時の社会状況、特に、政治制度や宗教制度、人々の暮らし、についても見ていく。そのことにより、人間イエスが何を見て、何を考え、宣教活動を行ったのかをより深く理解することができると考える。

研究方法については、前回と同様に、イエスの誕生から十字架における死、復活、昇天までが描かれている四福音書(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ)を基本資料として用いることにする。

## 2. イエスの生きた時代状況

「人間イエスの宣教活動に見られる福祉実践 (1)－誕生・洗礼・宣教－」(専修総合科学研究第24号、2016年10月20日発行)の中で既に、イエスの生きた時代について述べているが、特に、政治制度、宗教制度、人々の暮らしについて項目を分けて、詳しく見ていくことにする。

### 2-1. 政治制度

この当時、ユダヤ民族にとって最大の苦悩は政治問題であった。それは、パレスチナは強国に囲

まれ、しかも重要な交通路に位置していることもあり、絶えず強大な外国の支配下に置かれていたのである（八木、1968）。イエス当時のパレスチナはローマの直轄地として、総督ポンティオ・ピラト（26～36年）のもとに置かれていた。また、ローマの直轄地となっていたパレスチナで政治的支配権を握っていたのがヘロデ大王であった。

そして、そのようなローマの直轄地という状況ではあったが、ユダヤ人たちにもある程度の自治が認められていた。その中心となるのが大祭司カヤパを頂点とするユダヤ教の指導者たちであった。このような二重の支配構造のもとにユダヤは置かれていたのである（松永、1989年）。

まず、ヘロデ大王は40年にもわたる長期政権を行うことになる。ヘロデが行った政治的活動には以下のものがある（山口、2005年）。

#### ① ユダヤの軍事・要塞化

ヘロデはローマ帝国の「同盟王」として、ユダヤの軍事力を強化し、各地に要塞や砦を建築・再建した。全国各地の要塞は、税を取り立てる中継地にもなった。

#### ② 「警察国家」の設立

ヘロデは、今日で言う「警察国家」を設立し、多くの人々を政治犯や反逆者として捕えた。

#### ③ エルサレム神殿再建と神殿国家体制の強化

ヘロデは、ヘレニズム様式によってエルサレム神殿を再建し、数多くの建築事業を行った。神殿は、宗教的な働きをする場、ユダヤ最高法院（サンヘドリン）を中心に政治的な働きをする場であり、国家経済・銀行の機能を持つ場であった。

#### ④ ヘレニズム式建築事業の推進

ヘロデは、ヘレニズム・ローマ様式による建築事業を精力的に推進した。

#### ⑤ 重税と労働力の徴収

ヘロデの政策は、人口の90パーセントを占める農民から取り立てた税金と労働によって支えられていた。

ヘロデは、そのローマ化政策と権力欲・残忍な性格のためにユダヤ人からは憎悪の対象とされていたが、彼の卓越した政治手腕による功績により、ローマ皇帝からは高く評価され、前40年には「ユダヤ王」の称号と地位を与えられ、30年近く独裁者として君臨することになったのである。

### 2-2. 宗教制度

宗教界は一般民衆を救える状態にはなかった。指導者たちは派閥を組み、民衆から遊離していた。ユダヤ教は過去数世紀の伝統にしがみつき、律法厳守を唱えることと、儀式を執行することに終始するだけだった。そして、さまざまな宗教的派閥があった（新井、1976）。この派閥については、既に前回説明をしているのでここでは割愛をする（大澤、2016を参照のこと）。

ユダヤ人たちの信仰や実践には当然のことながら多様性があったと考えられるが、最も大切な神殿での礼拝は共有されていた。神殿での宗教儀式、特に毎年行われるいろいろな祭には、ほぼすべての社会階層のユダヤ人が共に参加し、そこでは民族の独自性が強く意識されるのだった（ボウカム、2013）。

ヘロデ大王は神殿の建設を行ったが、この「ヘロデの神殿」の境内の一番外側の部分は「異邦人の庭」と呼ばれ、割礼を受けていない異邦人（ユダヤ人以外の民族）が、そこまで入ることを許されていた。ユダヤ人の場合は、女性は「婦人の庭」、男性は「イスラエルの庭」までとなっていた。

そして、その奥に「祭司の庭」、聖所、至聖所が設けられていた。

「異邦人の庭」では、神殿に捧げる生贄として、牛、羊、鳩などが売られていた。また神殿に納めるお金はツロの貨幣と決められていたので、両替商もいた。特に、祭りの時には、大勢の巡礼客が押しかけていたので神殿は商売的には大繁盛をしていた。

イエス当時のユダヤ人の問題には、宗教と政治と経済とが密接に絡み合っていた。例えば、ローマの支配という政治的状況は、前述したように、過酷な徴税が存在していて、そういう意味では経済問題となり、さらに外国（ローマ帝国）に税を納めることはユダヤ教を信じるユダヤ人としては、他宗派の人々に自分たちの労働で得た大切なお金を捧げるという意味では宗教問題となった。また、国内では「律法を知らない土民（アム・ハーアーレツ）」が政治的・宗教的差別と貧窮に苦しんでいた、という状況が存在していた（八木、1968）。

最高法院は、議会と裁判所を兼ねた、ユダヤの最高機関で、70人の議員（祭司24人、長老24人、学者22人）で構成される。イエスの時代には、ファリサイ派の議員が多数を占めた。最高法院の職能は、宗教生活の監督、民事、刑事裁判であったが、死刑だけはローマの権限下にあった。議長は大祭司がつとめた（久米、1993年）。

この時代における宗教制度を支えた思想として、長い間、外国の支配下に苦しんだ意味を当時のイスラエル民族は、以下のような考え方をもち、現状を乗り越えようとした姿を見ることができる（赤司、1966）。

### ① 律法の強化

イスラエル宗教に基本的な律法（神の教え）を遵守することによって神の助けを得るという正統ユダヤ教の伝統を強調する考え。

### ② たしなみの思想

ただ真正直に正しいというだけではなく、人生をたくみに、たしなみをもって渡らねばならないと教え。

### ③ 終末観

この世の終わりに神の裁きがあり、義者と悪人とは分けられ、神の直接の支配が来る。そしてこの神の支配をもたらすもの、また神の国に王となるものがメシア（救い主）なのである、という考え。

しかし、このような宗教思想や宗教制度によって、人々は自分を「罪人」に入れたくはないので、自分より下位の人間を作り上げるようになり、その人たちに「罪人」のレッテルを張るようになった。その対象となったのが異邦人（外国人）や社会における最底辺の人々だった（特定の職業人、障害者、病人等）のである。（上村、2011）

## 2-3. 人々の暮らし

イエスの宣教活動の舞台は、ガリラヤの村々であった。イエスは、ガリラヤの小さな村ナザレで生まれ育った。ガリラヤは農村社会であり、そこに生きる90パーセント以上を占める農民は、大地を改良し、簡単な耕作用具で小麦・大麦・オリーブと油、ブドウとブドウ酒、また様々な野菜を作っていた。平均5、6名の家族で、収穫のほとんどは、ローマ帝国、神殿国家体制、ヘロデ・アンティ

パスによる三重の支配と徴税のために取り立てられていた（山口、2005）のである。

ローマ帝国は、上層階級と下層階級とを隔てる溝の深さをも特徴としていた。その大きな分割の一方の側には、支配者と統治者たちがいた。彼らは全人口の1パーセントを占めるにすぎなかったが、国土の少なくとも半分を所有していた。彼らと同じ側には、他の3つの階層（国土の15パーセントを所有した神官たち、軍の将官から専門的官僚にまでわたる家臣たち、下層階級からのし上がって巨万の富を築き上げ、政治的権力さえ手中に収めた商人たちが属していた（クロッサン、1998）。

一般のユダヤ人は宗教を意識はしていたが、特に生活に追われている下層の人々は、厳しい細かい律法を守る余裕はなく、しかも、宗教指導者のひとりであるパリサイ派からは律法や儀式への無関心を責められ、軽蔑をされていた。そこには、神の律法を守らない人々は、神の救いから外れた人々なのだという、考えがあった。パリサイ人はこのような律法を守れない、あるいは、様々な事情から守ることができない人々のことを「地の民」と呼び、罪人とみなしていた。

民衆は全体として、経済的にはローマ当局者、大土地所有者による搾取の対象とされ、宗教的・社会的にはパリサイ派などにより明らかに差別の対象とされていたのである（荒井、1974）。

### 3. イエスの宣教活動の内容とその特徴

洗礼者ヨハネからの独立と同時に、イエスは荒野から人里での宣教活動へ出て行く。彼の活動を一言で言うならば「神の国の到来を告げ知らせる」ということになる。しかし、この「神の国」とは必ずしも「国家」ではなく、神の支配・神の力の及ぶ範囲と言い換えることができる（松永、1989）。そして、イエスは自身の説教・癒し・奇跡を通して、この「神の国」というものがどのようなものかを人々に告げ知らせる。

#### 3-1. 説教

イエスはガリラヤ湖北岸のカペナウムを根拠地として、宣教活動を行う。初期の説教は平和で、民衆への思いやりと慰めに充ち、おだやかな励ましの言葉であったと思われる（新井、1976）。

（図表1）思い悩むな

22「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。23命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。25あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。26こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。27野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。」

（ルカによる福音書12章22節～28節）

並行記事は、「空の鳥・野の花」として、マタイによる福音書6章25節から30節にあるが、ルカの方がイエス自身の発言の原形をとどめていると考えられている。この言葉を、荒井は、以下の3つの点を挙げて説明している（荒井、1994）。

- ① イエスは、人間の命を論ずる際に、その視点を自然に移して、人間が自然に学び、自然に生きることを勧めている。

- ② 当時のイスラエルにおいて、人間にとって汚れていると考えられている鳥（からす）や保存すべき価値のない野辺の草花を挙げていることから、この世の価値基準からみれば最も小さいもの、最も弱いものが最も大切にされる。
- ③ このイエスの言葉の中に、5回も繰り返して否定形が出てくることから、何も作為しなくても在るがままで今生かされて在る小さな命を神はいとおしみ養っておられる。

また、22～23節の「思い悩むな」という言葉は原始キリスト教会の思想であること、「食べ物」や「衣服」よりも「命」や「体」の優位性を強調しているのもイエスらしくないとしている。反対に、この言葉は、当時の最低限の衣食にもこと欠き危機的な飢餓状態にある極貧者たちを、懸命に励まそうとするイエスの姿であるとしている（瀧澤、2006）。

イエスの宣教活動における説教の特徴として、イエスは、当時の社会状況の中にあって衣食にもこと欠くような生活困窮者（経済的・社会的）たちに対して、説教を通して、励ましを語ると同時に、このように人々の生活を苦しめていた元凶ともいえる当時のユダヤを支配している政治的、宗教的システムに対しても、批判の目を向けることも忘れなかった。そして、そのことが、政治的・宗教的権力者たちとの軋轢を生むことにもなったのである。

### 3-2. 癒し

聖書を見ると、イエスはありとあらゆる病人たちを癒している姿を見ることができる。このことに対して、文字通り「イエスは全ての病人を癒したのだ」とすることもできる。このことについては、以下のような解釈である（内田、2000）。

「イエスが万物の創造者である神から遣わされたお方であるなら、癒しの奇跡はむしろ理にかなっている。全能の神はいかなる病も癒すことができる。また、あわれみの神は病に苦しむ者を心にかけておられる。そのあわれみと力をもってイエスは病める人々の間に立った。だから、どのような病状も、社会的な制約も、彼の癒しの手を止めることができなかったのである。」

古代イスラエルにおいては、一連の医療行為＝検診、診断、治療、隔離、社会復帰の許可の権限を、すべてユダヤの最高法院をとおして、集中的に祭司の手にゆだねていた。祭司は臨床医のように、この権限を行使した。病人をかくまったり、病気を隠したりする場合、祭司は、最高法院にかわって、制裁権を行使することができた。一方、こうした祭司の職能は、厳密に魔術師や呪術師とは区別されていたのである（山形、2000）。

ユダヤ社会では、伝統的に病気は「神の呪い」による罪と汚れの結果であると信じられていた。したがって、宗教指導者である祭司による診断があり、病気が神に対する罪と汚れの結果もたらされたものである場合には、病人は社会的制裁をされることになる。イエスの宣教活動における「癒し」は、イエスが単に肉体的な癒しを行ったと考えるよりは、その病人が置かれていた様々な社会的な差別や偏見からも解放したと考えることができる。

また、イエスの「癒し」をした病人の多くは、きちんとした医療にかかることのできない貧しい人々であった。当時のユダヤ社会では、高額な医療品を要する医療は、ほとんどが社会の富裕層に独占されてしまい、貧困にあえぐ病人たちはそのような医療にかかることができなかった。病気を

治してもらうためには違法と考えられていた呪術や魔術、奇跡に頼る以外に方法がなかったのである。そのような、病人の必死な状況に対して、イエスは「癒し」を行った。しかし、これらのイエスの「癒し」のわざは体制側からは批判や憎悪の対象になった。

また、イエスの「癒し」のわざは、「神の国」つまり、「神の支配が間近に迫っていた。」または、「神の支配が見える姿で間近に迫っている。」というイエスの活動の中心的事柄であった。イエスは、「癒し」は神の国が到来していることのメッセージであると理解し、それは神に創造された無条件に愛され主体性をもつ1人の人間存在の共同体への回復であるとした（古川、2014）。

そして、イエスがなおした病人の中で多いのは、悪霊につかれた者、中風の者、盲人、重い皮膚病が多かった。福音書でとりあげられている病気には、伝染、流行病らしきものはほとんど見られないことから、むしろ日常のいわゆるストレスが原因で生じた病気が多かったと考えられる（田川、2004）。

### 3-3. 奇跡

イエスの行った奇跡について、私たちはどのように理解すればよいのか。その理解の方法の1つとして、以下の方法がある（赤司、1966）。

イエスの奇跡のさまざまな物語についても、歴史そのものがわれわれに教える言葉を聞かなければならない。そしてその場合、各福音書を比較検討することによって、聖書そのものが物語の成立の事情、その変化の過程を明らかにしてくれることが少なくない。

また、上村は、イエスの癒しや奇跡物語について以下のような理解を示している（上村、2011）。

福音書には、多くの癒しの奇跡物語がある。これらは後の作り話であるが、その核にはイエスの病人との交流があったと推測される。多くの者に奇跡的な仕方で食事を振舞った供食物語（マルコによる福音書6章30節～44節、8章1節～10節）も、それ自体は作り話であるが、その核にはイエスの雑多な人々との会食の記憶があるだろう。

本論文では、イエスの奇跡については、イエスは、奇跡を起こしたのか、起こさなかったのかという視点よりも、聖書の中にイエスの奇跡物語がある意味を考える方が重要であると考え。そのことは、前述した、「癒し」についても同様である。イエスが病人たちとどのように出会い、どのような関わりを持ったのかということを知ることの方がイエスの行った宣教活動についてより深く理解することができる。

しかし、イエスの奇跡物語は全くの作り話であるということもここでは断言することはできない。なぜなら、イエスによる癒しの歴史性を完全に否定することもまた難しいと考えるからである。全ての奇跡を合理的な解釈では説明することはできない。イエスの行った数々の奇跡は、神としての権威を持つイエスを明らかにするものであるが、同時に、現代に生きる私たちの世界観のパラダイム（枠組み）の転換を求めている、とも考えられる（内田、2000）。

ここでは、イエスの奇跡物語の1つである「5つのパンと2匹の魚で5千人を満腹させた」という奇跡を取り上げ、その意味することを考えることにする。

(図表2) 5千人の給食

34 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。35 そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。36 人々を解散させてください。そうすれば、自分で代わりの里や村へ、何か食べる物を買いに行くでしょう。37 これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが200デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。38 イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「5つあります。それに魚が2匹です。」39 そこで、イエスは弟子たちに、皆を組みに分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。40 人々は、100人、50人ずつまとまって腰を下ろした。41 イエスは5つのパンと2匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、2匹の魚も皆に分配された。42 すべての人が食べて満腹した。43 そして、パンの屑と魚の残りを集めると、12の籠にいっぱいになった。44 パンを食べた人は男5000人であった。

(マルコによる福音書6章30節～42節)

福音書には、ここに挙げた「五千人の給食物語」(マルコによる福音書6章32～44節、マタイ・ルカ・ヨハネによる福音書並行記事)と「四千人の給食物語」(マルコによる福音書8章1～10節、マタイによる福音書並行記事)が合計6つ含まれている。この箇所解釈としては、このような奇跡物語が、イエスのキリスト(救い主)としての力と権威を示す行為であること、そして、旧約聖書の奇跡と関連づけて理解する方法がある。

例えば、上記の39～44節では、旧約聖書における預言者エリシャの奇跡が意識されている可能性が高い。エリシャは、20個のパンで100人を満腹させた(列王記下4章42節～44節)。さらに、41節におけるイエスが弟子たちにパンと魚を弟子たちに渡す姿は、「最後の晩餐」における場面と重なっている(久米、1993)。これらのことから、「食べ物を与える」奇跡物語は、多くの場合「最後の晩餐」の先取りであり、聖餐の典礼を背景として伝承され、意味づけられていった可能性が大きい(荒井、1994)。

しかし、この箇所から人間イエスの姿を想像するもできる。それは、大勢の群衆と共に食事をされるイエスである。この箇所からも分かるように、大勢の群衆の大半は、自分たちで食事を持って来ることのできないほど貧しい人々であった。しかし、持っている人々は決して満足とはいえない自分たちのわずかな食事を差し出し、そのわずかの食事(5つのパンと2匹の魚)をイエスが中心となり、みんなで感謝して分け合いながら食べて満足した姿を知ることができる。

#### 4. イエスの宣教活動の意味するもの

イエスの宣教活動は、それを受け入れる者と受け入れない者との対立を生み出すことになった。しかも受け入れた者たちの間にも誤ったイエスへの期待が高まることになる(松永、1989)。特に対立については、イエスは、当時の宗教指導者たちであるサドカイ派、パリサイ派、律法学者たちと論争をした。そして、最終的には、十字架刑により処刑されることになった。

ここでは、「人間イエスの宣教活動に見られる福祉実践(1)－誕生・洗礼・宣教－」(専修総合科学研究第24号、2016年10月20日発行)とも多少、重複をしてしまうが、当時の宗教指導者たちの中心思想をみることにより、なぜ、彼らがイエスと論争をするに至ったのか、について考えてみる。

#### 4-1. 宗教指導者との論争から

イエスの時代は、ユダヤはローマの支配下にあったが、ローマはユダヤの政治・宗教に対しては直接関わらないように配慮をしていた。そのような状況の中で、ユダヤ人の日常生活に関わる政治、法律、宗教上の中心的役割を担っていたのがサンヘドリン（最高法院）であった。サンヘドリンは、宗教上の監督、指導とともに、立法、司法、行政、軍事の権限を持っていたユダヤの自治機関であった。そして、その組織は、エルサレム神殿の長であり、サンヘドリンの議長である大祭司の下に6～10名からなる「祭司長たち」と呼ばれる執行委員会があり、貴族祭司はエルサレム神殿の祭儀執行の長を司り、貴族信徒は神殿財産を管理していた。神殿財産担当者は献納物、神殿税、十分の一税を管理運用していた。その他「長老たち」、「律法学者たち」と呼ばれるグループがあり、全体で70人の議員で構成されていた。

祭司、貴族信徒を代表する長老はサドカイ派に属していた。この派に属する人々は経済的に力を持ち、社会的地位を持つ富裕層であり、律法学者は、ファリサイ派に属していた。彼らは、律法を厳格に守り、人々にも守るように説く一方で、律法を守ることができない人々を「罪人」「地の民」と呼び、差別をしていたのである。イエスは、このサドカイ派、律法学者たちと何度となく論争をしている。例えば、「安息日」についてイエスはファリサイ派の人々と以下のような論争をしている。

(図表3) 安息日論争

23ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めた。24ファリサイ派の人々がイエスに、「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか」と言った。25イエスは言われた。「ダビデが、自分も伴の者たちも、食べ物がなく空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか。26アビアタルが大祭司であったとき、ダビデは神の家に入り、祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを食べ、一緒にいた者たちにも与えたではないか。」27そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。28だから、人の子は安息日の主である。

(マルコによる福音書2章23節～28節)

「安息日」は、元来、古代イスラエル農民の農耕生活における休息日として定められたものである。後年、ユダヤ民族がバビロン捕囚時代に「天地創造の物語」が作りだされ、その中で「安息日」が聖別され、「安息日律法」がモーセ五書の中に取り入れられた。そして、この律法を解釈して多くの禁止条項を作っていったのである。

その中には、安息日に律法で禁止されている「仕事」として、「麦の刈り入れ」も入れられていた。律法とその細則を厳格に守ったファリサイ派の人々がイエスの弟子たちが行っていた「麦の穂を摘み始める」という行為に対してイエスに「御覧なさい。なぜ、彼らは安息日にしてはならないことをするのか」と言ったことは、むしろ当然のことであったとも言える。

モーセ五書の中にある十戒では、「安息日」について以下のような言葉がある。

「7日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。」(出エジプト記20章10節)



ファリサイ派の人々は、この教えを文字通りに守っていたともいえる。それに対して、イエスは、弟子たちの行為を正当化するために、旧約聖書にある「ダビデ王」の話（サムエル記上21章1～7節）を持ち出したのである。しかし、この25、26節は、本来、なかったとされている（荒井、1994）。つまり、ファリサイ派の人々の問いに対して、27節にあるように、イエスは直接、「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」と語ったと考えられる。そして、次の28節についてもマルコによって付加されたものである。

ここから分かることは、イエスの「人間主義」の考え方である。それは、「天上のことは神様におまかせするが、この地上ではわれわれ人間が責任を持っている」という意識が存在している（滝澤、2006）。このように、イエスは、ファリサイ派や律法学者たちと徹底的に論争をしていくのである。それは、人々を苦しめ、差別を平気で生み出すような当時の宗教制度に対する命がけの抵抗であったともいえる。

#### 4-2. 十字架への道

イエスが十字架刑によって死んだということは、多くの研究者によって歴史的事実であると認められている。十字架刑は、ローマの刑罰であるが、ローマの市民権を持つ者には適用されず、奴隷の身分の者に対し、極刑中の極刑として執行された。ローマの三大刑罰は、磔（はりつけ）と火炙りと獣に食われることであった。これらが三大刑罰であると言われる理由としては、非人間的で残酷であり、恥さらしになるだけでなく、最後に埋葬されるはずの遺体が残らないことであった（J・D・クロッサン、2013）。

そして、イエスが十字架にかけられた理由としては、イエスが行った「宮きよめ」を挙げることができる。「宮きよめ」は、共観福音書によれば、イエスとその死を前にしてエルサレムに上った直後に起こったことになっているが（マルコ11章15～18節、マタイ21章12、13節、ルカ19章45、46節）、ヨハネによる福音書では、逆にイエスの宣教活動の冒頭で起こったことになっている（ヨハネ2章13～17節）。ここでは、マルコによる福音書の記事を取り上げることにする。

（図表4. 宮きよめ）

15それから、一行はエルサレムに來た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追出し始め、  
両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。16また、境内を通して物を運ぶこともお許しにならなかつた。17そして、人々に教える言われた。「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたがたは、それを強盗の巣にしてしまった。」18祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたので、彼らはイエスを恐れたからである。

（マルコによる福音書11章15節～18節）

この記事を見ても分かるように、イエスは神殿の境内で、商人の台や腰掛けをひっくり返し、商人と巡礼者を強制的に境内から追いつけている。これらのことが意味するものは何だろうか。イエスの宣教活動全体を見ても分かることだが、それは、神殿に対するイエスの態度である。それは、単に「神殿」という建物についてだけでなく、「神殿」を支えるユダヤ教の全宗教的支配体制に向けられていくのである（田川、2004）。

巡礼者は、あらかじめ神殿に供えるための犠牲を用意しなければならなかった。これは前もって

用意した動物を持ちこんでもよいが、傷の有無を検査されるので、神殿の一面で売っていた市価よりも数倍高い犠牲の動物を買わされたのである。また、神殿内では、献金もローマその他の貨幣を、ヘブライの貨幣かフェニキアのティルス貨幣に両替商で交換をさせられ、手数料が取られた。

このように、神殿内で商売を営み、多額の利益を得ていたのが当時の大祭司であったアンナスを中心とする祭司貴族であった。つまり、ユダヤ教指導者たちは神殿を利用して自分たちの私腹を肥やす巨大宗教制度システムを作っていたのである。

このことに対して、イエスは暴力的とも見える実行使を行ったのである。イエスが問題視したことは、神殿が民族的な排他的体制の中心基地で、神の国に真逆な存在であったことである。そこでイエスは、「宮きよめ」で神殿の財源を失わせようとしたり、さらに、神殿の崩壊も予告している。しかし、それ以後、イエスは、ユダヤ当局にとって最も危険な人物となったのである（古川、2014）。

#### 4-3. 十字架の意味するもの

イエスが十字架刑で殺されたという事実には、ローマ総督ピラトが積極的にイエスを処刑しようと決断した、ということを示している。なぜなら、十字架刑はローマ帝国による正規の処刑方法であり、もし、大祭司を中心とするユダヤ当局だけがイエスを殺そうとしたならば、石打ち刑にしたからである。このことから、イエスの殺害には、ユダヤ教当局、ローマ帝国両者がイエスを殺したという事実が分かる（田川、2004）。つまり、イエスはユダヤ当局にとってもローマ帝国にとっても都合の悪い存在だったということができる。

ユダヤ当局にとっては、イエスの宣教活動により、民衆がイエスの側に付き、抗議行動を起こすのではないかと恐れたことを挙げることができる。イエスを取り巻く民衆の熱狂ぶりをローマ軍が自分たちの支配に対するユダヤ民族の反乱の兆候として受け取り、何らかの軍事的介入を引き起こすという危険性があったのである。このことは次の聖書箇所からも知ることができる。

（図表5）. イエスを殺す計画

47そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。48このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。」

（ヨハネによる福音書11章47、48節）

そして、ローマ帝国からすれば民衆がイエスを「ユダヤ人の王」としてみなしていたので、政治的反乱を起こすのではないかと恐れていた。だから、ローマ総督ピラトはローマに対して反乱を画策したというユダヤ当局の告発を受けて、イエスに十字架刑という極刑を言い渡した。つまり、イエスはローマ帝国に対する政治犯、反ローマ的メシア運動の指導者として処刑されたのである。そして、弟子たちは、イエスを見棄てて逃げてしまったのである。イエスの十字架上での最後は共観福音書（マタイ27章45～56節、ルカ23章44～49節）ヨハネによる福音書（19章28～30節）全てに記述されている。

(図表6). イエスの死

33夜の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。34三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお捨てになったのですか」という意味である。35そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。36ある者が走り寄り、海綿に酔いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見てみよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。37しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。

(マルコの福音書15章33節～41節)

特に、問題となるのが下線部      である。これをどのように読むのかについては、いくつかの解釈がある。この言葉が旧約聖書の詩篇22篇の冒頭「わたしの神よ、わたしの神よ　なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず　呻きも言葉もきいてくださらないのか。」から始まることから、イエスはこの詩篇を口ずさもうとしたのだと解釈をする。

そして、この詩篇の祈りは「助けを求めてあなたに叫び、救い出され　あなたに依り頼んで、裏切られたことはない。」(詩篇22篇6節)と続くことから、イエスは、神に対して絶望を抱くことはなく、神に全幅の信頼と希望を置いていたのだ、と考える。

一方で、詩篇22篇2節に対応している言葉からイエス自身の発言ではなく、37節の下線部      の「イエスは大声を出して息を引き取られた」がイエスの最後の姿であり、これは、絶望と呪詛の込められた断末魔の絶叫とする解釈も成り立つのである(滝澤、2006)。

他にも様々な解釈が成り立つことになるが、いずれにしてもその解釈の根底には、イエスの十字架の死を、イエスという人間の存在そのものをどのように理解するのかにつながることになる。そして、ある場合は、イエスの十字架の死の向こう側に復活の信仰が芽生えることになり、その時からイエスをキリスト(救い主)と信じる原始キリスト教会が誕生することになる。

## 5. おわりに

1. はじめに、でも述べたように、本論文の目的は、聖書における人間イエスに見られる福祉実践と思われる活動について取り上げ、それが現在の私たちに対してどのようなメッセージとなっているのかについて考察をすることである。イエスの宣教活動の特徴を知る上で、イエスは誰に対してどのような行動をとり続けたのかということを知ることが重要であると考え。共観福音書やヨハネによる福音書ではイエスが人々と食事を共にしている場面を多く見ることができる。何人かの研究者は、このことについて、以下のような説明をしている。

「イエスの元来の運動の核心、つまり精神的資源(癒し)と物質的資源(食事)を平等に分かち合う運動の核心がある。私はこのことを力を込めて強調したい。また、その物質性と精神性、事実性と象徴性は切り離され得ないことを力説したい。」

(ジョン・ドミニク・クロッサン、1998)。

イエスの活動は、「罪人」とレッテルを貼られた被差別者と食事を共にし(マルコ2章13～17節)、病を抱えた人々の世話をすることであった。こうした活動は、人間存在の平等性をアピールするた

めの象徴行動でもあった。それゆえイエスの活動は、それ自体が差別を現実のものとしている市井の人々への問いかけでもあった。

(上村、2011)

聖書では、このようなイエスの行動に対して当時の宗教指導者たちからは、激しい非難の言葉が投げかけられていることを見ることができる。

(図表.7) 洗礼者ヨハネとイエス

18ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、19人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ。』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。』

(マタイによる福音書11章18～19節)

この箇所には、イエスが洗礼を受けた、洗礼者ヨハネとイエスの宣教に対する違いと当時の宗教指導者たちが彼らの宣教活動をどのように見ていたのかが示されている。まず、荒野で厳しい禁欲主義を貫き、人々に対しては、「悔い改め」の洗礼を行っていた洗礼者ヨハネに対しては、そのあまりにも厳しい禁欲主義から、『あれは悪霊に取りつかれている』と言っている。

そして、洗礼者ヨハネのように、禁欲主義者ではなく、社会から差別された人々と共に食事をするを通して、「神の国」のあるべき姿を人々に示していたイエスに対しては、『大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ。』と言っているのである。

それに対して、イエスは、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と言っている（マルコによる福音書2章17節）。当時のユダヤ教において、特定の人間集団を「不浄」と決めつける基準は2つあったと思われる。1つは、ユダヤ教の律法（トーラー）と、これを解釈して後世に伝えた律法学者たちによる律法の細則（ミシュナー）である。

例えば、遊女は姦淫を禁じているモーセの十戒（律法）に違反するし、徴税人も偶像礼拝を禁じているので、ユダヤ人から見たら偶像を礼拝している異邦人に仕えているということで「不浄の民」つまり、「罪人」になるのである（荒井、1994）。当時の社会は、このようにして、人を「義人」と「罪人」に分けてしまい、そこには差別と偏見が満ちていたのである。

イエスは、当時の宗教的・社会的価値基準によって「罪人」とされている人々と共に「食事」をし、「癒し」や「奇跡」の行動を積極的に行っていくのである。そこには、このような社会システムを作り上げてしまった宗教指導者やローマ帝国に対する厳しい批判も含まれていたともいえる。そして、最後には十字架刑に処することになるのである。

イエスの宣教活動は、民衆から多くの支持を受けるようになる。それは、ただの人気ではなく、奇跡信仰にのった熱狂的な人気であった。その人気と、鋭い社会批判、宗教批判が混然一体となったところで、権力者たちによって十字架につけられたのである（田川、2004）。

イエスの宣教活動を現代に当てはめてみるならば、現在の社会において、私たちが社会的価値基準等の理由により、人間を「義人」と「罪人」（あるいは、「良い人」・「悪い人」、「勝ち組」、「負け組」）といったような格付けを「他者」に対して行い、自分たちとは切り離された存在として、差別・

偏見を持つ時に、まさに、私たちはイエスを批判し、十字架にかけた当時の宗教指導者たちと同じ場所に自らを置いていることになる。

あるいは、自分たちはそのような差別・偏見をしてはいないし、ただ社会のルールや常識に従って生きているだけだと言うかも知れない。その時にも私たちは、自らがこれまで正しいと思っていた社会のルールや常識というものについて再考することが求められる。

なぜなら、自分たちが正しいと思っている、その社会の常識やルールの中に「何か」に対する無関心や排除が含まれている危険性が常にあるからである。聖書を通して、人間イエスの宣教活動を見ていく時に、現在に生きる私たちに対して、私たちがその存在を無視・差別をし、偏見を持っているかも知れない「最も小さき者」から目を離さずに、共に生きていくことの大切さを教えているといえる。

## 引用文献・参考文献

### 著書

1. 赤司道雄、『聖書 これをいかに読むか』、中央公論社、1966年
2. 新井智、『聖書 その歴史的事実』、日本放送出版協会、1976年
3. 荒井献、『イエスとその時代』、岩波書店、1974年
4. 荒井献、『問いかけるイエス 福音書をどう読み解くか』、日本放送出版協会、1994年
5. 村静、『旧約聖書と新約聖書ー「聖書」とはなにか』、新教出版社、2011年
6. 大貫隆、『イエスという経験』、岩波書店、2003年
7. 久米博、『キリスト教 その思想と歴史』、新曜社、1993年
8. 久山道彦・泉守彦・吉岡良昌、『考えながら学ぶキリスト教』、川島書店、2000年
9. G. ヴェルメシュ、『イエスの受難 本当は何が起こったのか』、教文館、2010年
10. ジョン・ドミニク・クロッサン、『イエス あるユダヤ人貧農の革命的生涯』、新教出版社、1998年
11. ジョン・ドミニク・クロッサン、『イエスとは誰か 史的イエスに関する疑問に答える』、新教出版社、2013年
12. 田川健三、『イエスという男』、作品社、2004年
13. 滝澤武人、『イエスの現場』、世界思想社、2006年
14. 古川敬康、『キリスト教概論 新たなキリスト教の架け橋』、勁草書房、2014年
15. 松永希久夫、『歴史の中のイエス像』、日本放送出版協会、1989年
16. 八木誠一、『イエス』、清水書院、1968年
17. 山形孝夫、『聖書の起源』、ちくま学芸文庫、2010年
18. 山口雅弘、『よくわかる新約聖書の世界と歴史』、日本キリスト教団出版局、2005年
19. リチャード・ボウカム、『イエス入門』、新教出版社、2013年

### 論文

1. 金相圭、「イエス・キリストの医療福祉的行蹟」、『川崎医療福祉学会誌』Vol.2 No.1、1992年
2. 島田裕子、「癒しの思想ーマルコ福音書のイエスの癒しにみられる人格的癒しー」、『キリスト教社会福祉学研究』第46号、日本キリスト教社会福祉学会、2013年

3. 春名苗、「福音書における女性－旧約聖書時代の女性の地位とイエスの女性への関わり－」、『キリスト教社会福祉学研究』第41号、日本キリスト教社会福祉学会、2008年